

国語科

主任：大塚 仁史

(1) 今年度の目標

- ① 論理的な思考能力の向上。
- ② より豊かな人間性を培うために感受性を磨く。
- ③ 古典読解力の向上。
- ④ 読書指導の強化。

(2) 主な取り組みの計画

- ① 「知りたい」と思わせる発問の仕方を研究する。
 - ア 教材として韻文を扱い、言葉が背負っている背景を推察する。
 - イ 斯文土曜塾において、学年を追って難解な評論の記述問題に取り組みさせる。
 - ウ 評論文を要約させることを繰り返すことにより、論理的な思考を善成する。
- ② 名文といわれている古文・漢文の暗唱や、基礎力テストの徹底により古典読解力を養う。
- ③ 一年生では基礎力テストにて、動詞→形容詞・形容動詞→助動詞という段階を踏むことにより、日本語における文末表現の微妙な差異に気づかせ、現代語訳を注意深く行うことの重要性に気づかせる。
- ④ 生徒が書物に触れる機会を増やす。

(3) 授業アンケートの結果と分析

Iの「授業に対する感想」では「よくわかる」「大体わかる」がほとんどであり(1年現文92%、古典85%・2年現文85%、古典89%・3年現文92%、古典96%)、「授業進度の要望」も「今のままでよい」が大多数を占める(1年現文85%、古典72%・2年現文82%、古典84%・3年現文88%、古典79%)。「授業に対して」も「今のままでよい」が過半を占める(1年現文62%、古典60%・2年現文64%、古典75%、3年現文68%、古典79%)。今回の分析では、古典において「よくわかる」と「大体わかる」の間にもIIの「予習の状況」による差異が明確であった。学年進行によって、授業前に「自力で口語訳」してみることの重要性が如実に表れた。

- (よく解る者のうち、全文口語訳する者は1年32%、2年43%、3年52%)
- (よく解る者のうち、単語だけは調べる者は1年23%、2年3%、3年6%)
- (だいたい解る者のうち、全文口語訳する者は1年16%、2年43%、3年32%)
- (だいたい解る者のうち、単語だけは調べる者は1年16%、2年6%、3年27%)

IIの「自分の学習と成績」については、概ね「努力に応じた結果は出ている」「努力不足のため成績が不振である」に分けられる。現代文は前者が多く、古典では二分される傾向は例年通りである。

なお、Iの②で「板書の工夫」を求める生徒(1年現文16%、古典16%・2年現文13%、古典9%)と、IIの①で「努力不足のため成績が不振」(1年現文26%、古典15%・2年現文28%、古典24%)が、有意の相関を示している。さらに調べると、この二つがともに選ばれている生徒の現代文では、74%、古典では75%が、IIの②で授業に対して予習を行わず、かつ授業中ノートを写すだけになっており、準備をせずに結果だけを求めていることがうかがわれる。

IIIの「基礎力テスト」では「読解に役立つ」とする者がほとんどであった。「基礎力テストに対して自分自身の取り組みはどうでしたか。」という問いには、「自分なりに取り組み、理解することもできた」は1学期に2年生では46%、1年生では31%と演習不足が目立ったが、二学期は基礎力学習プリントを適宜使用したためか、二学期末にはそれぞれ53%、52.5%とややもちなおした。

自由記述では、学級文庫に対する好意的な記述が目についた。

(4) 今後の課題

現代文の授業では、漢字テスト、教科書、読書の記録という取り組みが中心となっている。「授業が

わかりにくい。」という生徒(1年現文7%古典14%、2年現文14%、古典9%、3年現文8%古典3%)のうち、1年生71%、2年生67%、3年生の58%が、授業中の活動として、「板書を写すだけ」を選んでおり、読書量も少ない。問題演習などの取り組みが不足しているのは事実で、限られた授業時間のなかでどう対策をたてていくかは課題である。現代文の学習が「与えられた問題文を理解し、問題を解く」という枠の中でとらえられ、「広く深く考える」という営みとつながっていない生徒が多い。授業で、読み解く「スキル」を教えることはできるが、そのスキルの使い方の凡例となり得る「教養」には、幅広い読書が必要である。学習時間調査の中で、国語の学習時間が年々減少している中、いかに読書の時間を確保するかが、今後の課題となる。

古典では、(3)でも述べたように、予習の継続により読解する力を培い、「基礎力テスト」での理解が定着へとつながるといった結果が出ている。基礎力テストの指導の徹底を図るとともに、国語を学習する習慣がついていない生徒にも、学習しやすい課題を与えるなど、水を向ける指導が求められる。